

世界の著名な特許にみる ————— 第4回

# 世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

特許王エジソン その3 エジソンが最も愛した発明～蓄音機事業～



科学&知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

## 1. はじめ

本稿で、エジソン最終回となる予定でいました。なんということでしょう！発明事業ですが、あまりにエジソンが多数の発明を創出し、それらを事業化し、そして市場開発競争を繰り返して、そこから膨大な経験値を得るために、端折ってしまうにはあまりに勿体ないと感じました。また、科学史の系譜の面白さ、並びに発明という、人類最初の発見と工夫の楽しさもお伝えしたいですし、人間的な苦悩や喜びの部分も書きたいと思います。また偉人に対して、この程度で終わる人物ではないぞ、ということ、失礼に当たらないように、という思いもあって、これはもう長い付き合いとなる予感です。今回も、色々と現代にも通じる小ネタも挟みながら、エジソン流の発明事業を多角的な観点からご紹介していきます。読者の皆様、どうぞ、もうしばらく、お付き合いくださいませ。

## 2. 前回までのふりかえり

1877年、エジソンは30歳の時にメンローパーク研究所にて、電信・電話開発の延長線上に、偶然にも蓄音機（フォノグラフ）を発明しました。

人類が初めて、「音声を記録し、再生する」ことに成功した瞬間でした。これを機に、「音を追求する」オーディオ開発の技術史の幕が開きます。

現在、私たちは毎日当たり前のように、音声や楽曲の再生を楽しんでいますが、当時はまだ「音の正体」が殆どわかっていない時代でした。声を吸い取られたら（記録されたら）、寿命が短くなるかもしれない！とまで恐れられた、不気味で、得体の知れない、未知の機器でした。最初のうち歌手たちは気分的にもまた仕事が奪われるとも考えて嫌ったそうですが、大ヒットに繋がることを理解したあとは、押しかけました。

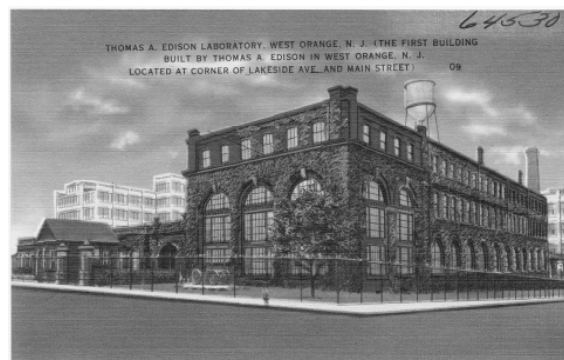
さて、この「音のカンヅメ」は、画期的な概念として世界的に一大センセーションを巻き起こしました。そのため、一般人から見れ

ばエジソンは、いわば魔術師の類と同じような人物であって、エジソンの元には世界中から様々な種類の人々が押し寄せました。そして、「メンローパークの魔法使い」（「オズの魔法使い」の舞台の様に、のどかな場所に研究所があったことも影響したもじりだったかもしれません）の二つ名で人々に記憶される期待の発明家として名を轟かせることに成功しました。しかし、蓄音機は新し過ぎた発明であったがために、事業化を目指すには、市場ニーズや技術開発の面も未だ熟しておらず、エジソンにとっても社会にとっても更なる時間が必要でした。そのため、エジソンは一旦、蓄音機の事業を休眠状態とさせ、既に社会的要請の高まっていた電灯・電力事業化の方を先に手掛けました。そして、蓄電器の発明で得た抜群の知名度を生かして開発資金を一気に集めることに成功すると、後発の発明者ながら、32歳で白熱電灯の発明を破竹の勢いで完成させ、35歳で白熱電灯・電力事業を開始し、開発事業競争に膨大なエネルギーを注ぎ込みました。そうして先行していた発明家スワンらの事業を特許戦術、事業構想・資金調達・開発スピード・販売戦略で押さえ、「白熱灯の発明家」としての名誉を獲得し、電力システムの事業展開を縦横に繰り広げる絶頂期を経験します。しかし、それから10年経ち、交流システム技術の先読みと事業展開で下手をうったエジソンは、電力事業のシェアをライバル発明家のテスラ&ライバル発明事業家のウェスティングハウスに奪われ、さらに15年後には金融資本家モルガン＆GE（ジェネラルエレクトリック社）が舵を取るようになり、電力事業では粗方の勝敗がついたエジソンは、栄光と挫折の両方を味わっていました。これが前回までの部分です。

### 3. エジソン40代からの発明事業・蓄音機

さて、40代に入ったエジソンは、新たに建設したウエストオレンジ研究所に移りまし

た。メンローパーク研究所から、更に各段に研究設備が整う外観も瀟洒な工場兼研究所がウエストオレンジ研究所です。現在、国立公園内の歴史的遺産として管理されており、ツアー（バーチャルツアーも）を楽しむことができます。



ウエストオレンジ研究所 Thomas A. Edison Laboratory, West Orange, N. J.  
出典：Boston Public Library

エジソンが白熱灯・電力事業に全精力を傾けていた10年余りの間に、蓄音機の方は、エジソンの発明品「フォノグラフ」から更なる刺激を受けた発明家達によって改良発明が続けられていました。その中には、エジソンが先を越されることになった「電話の発明」の名誉を勝ち取った、発明家ベルの勢力がいました。ベルはベルで、「蓄音機の発明」ではエジソンに先を越されてしまっていた状況で、悔しさを抱えていました。また他に、発明家ベルリナーも登場します。エジソンはライバル達の発明品をみて、競争心が沸き上がりました。そして、電力事業で傷ついた発明家としての自信と名誉を取り戻すべく、休眠状態にあった蓄音機事業を猛烈な勢いで再開させたことで、この三者三つ巴の戦いの火ぶたが切って落とされました。

発明家たちは特許を回避しながら、よりよいオーディオ機器開発競争を繰り広げ、エジソンは40代で「蓄音機の発明家」として再び一時代を築き上げました。1890年代には年間25万ドルの利益をもたらし、「フォノグラフ」工場で雇った従業員は1000人にもものぼり、大